

石仏あれこれ

シリーズA 石仏を訪ねる

A3 秩父・金昌寺 1976

森隆一



(秩父札所連合会ホームページより)

A3. 秩父・金昌寺 1976

東京で開かれた学会の後、秩父を訪れることにした。子供の頃‘秩父○○’という映画を見た記憶がある。あるいは、中学校の通学路には東映の映画館と大映の映画館があったので、看板だけを見ただけかもしれない。調べてみると、‘秩父水滸伝’という映画が1954年に製作されていた。

また、行先に迷った時の方針としていた‘無宿泊県をなくす’にもよる。埼玉県は関東で残っていた唯一つの県であった。

秩父に面白い石仏があることは、本を読んで知ったはずである。1976年に読むことのできる‘秩父・石仏’をタイトルに含む本は、“秩父路 野仏の詩 森山隆平 1973 椿書院”のみである。

ということで、当時乗って見たかった西部特急レッドアロー号に乗って、秩父に出かけた。初めての宿泊を伴う石仏撮影である。宿泊は、秩父市郊外の小高い場所にある国民宿舎にした。駅にある広告を見て決めたと思う。

‘秩父・国民宿舎’で検索したら、小鹿野町にある両神荘しかヒットしなかった。この頃は、学生時代のユース・ホステルから、国民宿舎・共済組合宿舎・ビジネスホテルに宿泊がグレード・アップしていた。

次の写真は宿舎から見た秩父市街の夜景である。中央に見られる明かりが秩父駅周辺と思われるが、写真からは判断できない。夜景の遠景写真は殆どこんなものかもしれないが、ベタ焼きスキャンではこのような写真が

苦手である。



記憶は定かではないが、翌日の予定の大筋は、午前中に金昌寺、午後に三峯寺とし、移動中に秩父 33 カ所のお寺の幾つかに立ち寄るというものであった。

予定に従い、金昌寺に向かった。移動にはバスを利用した。地方都市のバスの本数は、1路線につき、朝・夕は1時間に1本昼は2時間に1本というのが大まかな基本である。これから、滞在時間は1時間半程度である。後で、往きはタクシーで、帰りはバスを用いる方法も採用するようになった。

秩父札所連合会「第四番 高谷山 金昌寺」より

秩父札所の中でも屈指の仁王門をもち、石仏の寺としてもよく知られている。大わ

らじがかけられた仁王門をくぐれば、そこかしこに石仏が見られ、境内には 1300 余体の石仏が並ぶ。本堂の回廊右手には、有名な子育て観音像がやさしいまなざしを投げかけている。

観音堂右手に祀られている、膝に抱く赤子に豊かな乳房をふくませようとする観音様は、ごく当たり前の母子の姿で、満足そうな笑みとやさしいまなざしは見る者の心を和ませる。手の届く場所にあるので、そっと触れる女性も多い。寄進者の吉野屋半左衛門が、金昌寺のご本尊の靈験で子を授かったものの、その後子と妻をあいっいで失ったため、生前の母子の姿を浮世絵師に下絵をかかせて建立・供養した仏像である。当時は人前で子にお乳を飲ませるようなことはしなかった。

境内には 1300 余体の石仏が祀られている。天明 3 年(1783 年)に始まる大飢饉などの死者の供養のために、古仙登嶽和尚が発願したもので、かつては 3800 体程あったといわれる。寄進者には江戸、武州をはじめ紀州、越前などの大名家に縁あるものも見られる。

当時は由来などは何も知らず、ただ石仏群が有名であるということだけで訪れた。とにかく、山門をくぐり、道なりに歩くとすぐに観音堂に着く。子育て観音はすぐに目にとまる。この観音は 2 つの点で通常とは異なる。1 つは、石材が大理石であること、もう 1 つは、半裸で授乳している姿である。子供により乳首は隠されてはいるが、露出度からはミロのヴィーナスと同じである。庶民が立ち寄れる場所、いわば公衆の面前に、セミ・ヌ

ード像が置かれているのはかなり珍しいことではないかと思う。解像度を2倍程度上げたものを掲げる。



この観音は、慈母観音、マリア観音とも書かれている。慈母観音は口語と文語のような感じで違和感はないが、江戸時代にマリアとか聖母という概念はなかったはずで、マリア観音には違和感を覚える。クリスマスのようなものかもしれない。授乳観音・含ませ観音という名を思いついたが、今一つの感である。

大理石製の仏像は他に見た記憶がない。日本で大理石が採れるかどうか調べてみた。

Mine stone 「大理石について」では

日本では山口県、岐阜県、福島県、高知県、徳島県、福岡県、埼玉県、茨城県、静岡県、岩手県などで産出される。特に山口県美祢市で産出される物は建築材料としても利用可能である。多くは粉碎し工業原料(炭酸カルシウム)として利用されているが、彫刻、工芸品やインテリア製品にも加工される。

山口県美祢郡秋芳町秋吉台、および厚東川を隔てて向かい合う美祢市台山に産する、古生代石炭紀から二畳紀にかけての石灰岩の石材名。秋吉台は色物や更紗模様(石灰角レキ岩)のものを産するが、国定公園の自然保護の制約もあって、産額はきわめて少ない。台山の石は、花コウ岩類の貫入によって変成を受けた、〈長州霞〉と呼ばれる白色から灰色の結晶質石灰岩(大理石)が多く、現在では日本最大の大理石産地となっている。

と書かれている。

観音堂の脇から裏山にかけて石仏群が並んでいる。解説からは 1300 体ほどということである。

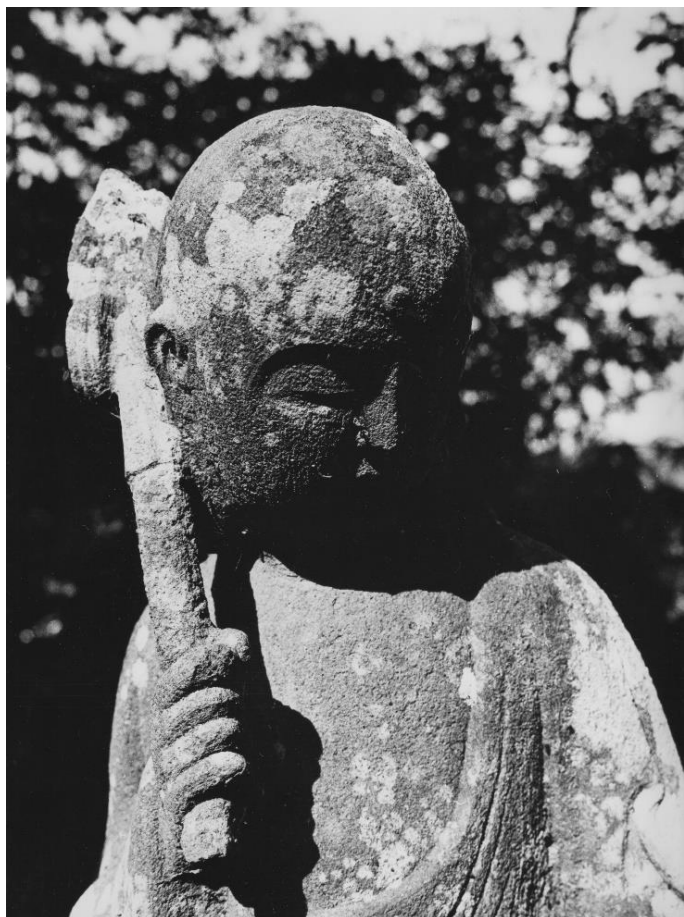
フォトさいたま→秩父三十四ヶ所観音霊場「[秩父札所第4番 金昌寺](#)」には、主な堂宇と石仏の写真と境内の略図が掲げられていて、この裏山の裾に興味ある石仏が幾つか見られる。

写したのは観音堂に近い部分であるが、これらを見ていくことにする。



左の写真は大日如来である。肩までの丸い後背をもつ石像は珍しいので

はないか。右は馬頭観音と思われる。馬頭観音は信州から三河にかけて、街道沿いによくみられる。



右側の石像に関しては、上記‘フォトさいたまでは、右手に徳利をもち、左手で大盃を逆さにしている石佛がある。酒呑み地蔵と呼ばれており、この地の名主さんが、お酒の上で失敗したので、「もう酒は呑みません。」と代官の前で誓ったのに由来すると云われている、と書かれている。

ここまででかなり疲れた。写真を撮る時は試験を受ける時のような疲労

感を覚える。あとは記録的な写真を撮ることにした。これらを眺めていく。
これらはベタ焼きからスキャンしたものである。



上・左の写真は観音堂横にある
小石仏群である。上・右の千手観音と
前に取り挙げた馬頭観音は信州で
見られるものを連想させる。例えば、
左の千手観音は松本・玄向寺のもので、
これに似ていると思ったが、それ程
でもない気もする。しかし、雰囲気は

似ていると感じた。

以下は、裏山への登り口辺りまでに見た石仏である。



ここまででかなりの時間がかかり、予定の所要時間も残りは僅かとなった。ここで、予定通りにするか、予定を変更して撮影を続けるかを選択することになる。2,3年後ならば後者の選択も可能であったかもしれないが、日帰りが難しい初めての所では前者に重きをおくことになる。また、昼食をとる所が見つからなかったため、残念ながら次に進むことにした。

あとがき

1976年に所蔵していたと思われる文献は、本文で挙げた

「秩父路 野仏の詩」、森山 隆平、椿書院、1973

である。これらの文献には交通手段が書かれていない。

旅行のガイド・ブックとして、交通公社発行の‘新日本ガイド’を愛用した。早く出版された北海道は改訂13版が1985年に、奈良は改訂12版が1986年に、近江若狭は改訂10版が1986年に出版されているから、改訂は年1回とすれば、1973年、1973年と1976年に出版されたようだ。すなわち、写真を撮り始めた北海道旅行と石仏写真を主にした慈眼堂訪問時には、新日本ガイドの北海道と近江若狭は出版されていた。これはかなり詳しく寺社などが収録されており、かなりの石仏も言及されている。さらに、観光ガイドのため、交通手段も書かれている。

このNo.7 武蔵野秩父丹沢は、改訂7版が1985年に発行されているから1978年に出版された可能性が高い。このガイドがあれば、三峯神社には行かなかったと思われる。

交通手段について述べよう。当時は車を持っていなかったのも、電車とバスを乗り継いで出かけた。今は、公共交通機関という用語が普及している。この後、少し交通費はかかるが、往きはタクシーを利用し、帰りはバ

スを利用するほうがよいと気がついた。

秩父 金昌寺では、池袋から西部秩父まで西部特急ちちぶ号(当時はレッドアロー号)で約1時間半程度、西部秩父から金昌寺まではバスで20分ほどで、現在1時間に1本である。地方都市のバスについては、「ローカル路線バス乗り継ぎの旅」よりはましかもしれないが、これに近い状況といえる。

初めての土地では、普通の寺社旧跡巡りと石仏写真とどちらをとるかの選択を何度かせまられた。この最初が秩父旅行で、考えてみれば、神社には本質的に石仏は無いはずにも関わらず、三峯神社を訪れたことである。とにかく、バスを降りて周辺の写真を撮った後、ここで写真撮影を続けるか、諦めて、秩父33カ所の幾つかを回るかを考え、後者を選択したが、バスを1時間半待つことになった。このバスを待つ間に、‘石仏写真を撮るためには車が必要’と考え、‘還ったら車を買おう’と決意した。

最後に、石仏写真を撮るのは思ったより疲れる。肉体的な疲労ではなく、車の運転に近いが、むしろ、試験を終えた後のような感じである。そこそこの写真が撮れたら、しばらくは流して撮り、これを繰り返すようにした。